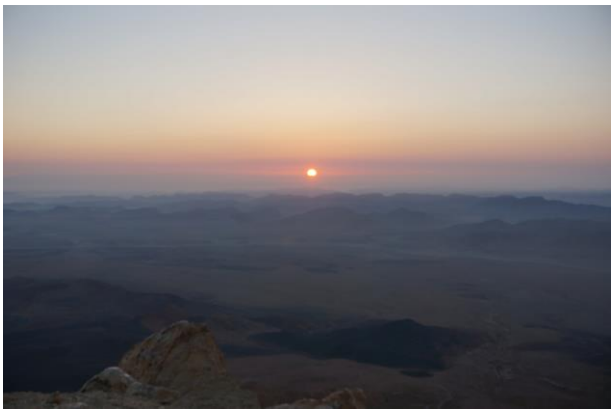
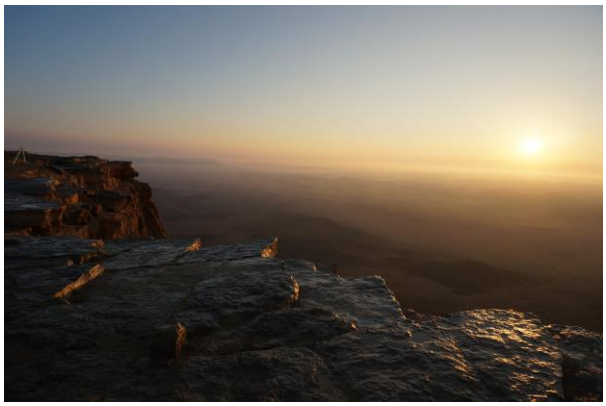
2014 年 1 月 1 日（水）

朝、ネゲブ砂漠のラモーン・クレータの初日の出を見る。
この景色も絶景だ。しかし、こんなところをモーセに率いられた民は40年さまよったのだ。





日の出を見た後ホテルで朝食。キッパを被った男性がいた。ヘアピンのようなもので留めている。
ベエルシェバへ北上する途中、Ein Avdat 国立公園で山羊の群れを連れたベドウィンに出会った。まるでタイムスリップしたようだ。ここは砂漠の中のオアシスで実を指で潰すと水が出てくる植物があった。やぎはこれを食べていたらしい。
予定外だったが、ここをしばらく散策した。

ベエルシェバは通過するだけ。予想外に都会だった。

分離壁

ベツレヘムはパレスチナ自治区なので、イスラエルナンバーのレンタカーは入れないという情報があったので、車を止めてアラブのタクシーを使おうとしたが、350シェケル（約１万円）だというので断ってとにかく行ってみることにした。
ところが検問の兵士は「Happy New Year!」とにこやかで、記念のコースターを渡され、パスポートも見せず無事通過できた。降誕教会を目指したが、ここも狭い道で渋滞。ようやく路上駐車できる場所を見つけた。
元旦だがまだクリスマスツリーが飾ってあり、人が大勢訪れていた。

ここでも洞窟のようなところが降誕の場所とされている。日本人が「馬小屋」としてイメージするのとは違うようだ。

街を歩いていると、小さな子供が「ガムを買ってくれ」「お金をくれ」としつこく付きまとってくる。確かにここはアラブの町なのだと感じる。

帰りは検問所で渋滞してかなり待たされた。その間も止まっている車に多くの物売りが近寄ってくる。

エルサレムに着いたのは夕方で、イスラエル博物館も閉館 1 時間前だったので、まず死海写本を見て、その他は駆け足で見て回った。
「Herode The Great]」というヘロデ大王の特別展をやっていた。ヘロデ大王は多くの宮殿を建て絶大な権力を持っていたようだ。そのヘロデがイエス様の誕生を恐れたのだ。

レンタカーを返却するため営業所を探したが見つからず。18:00 過ぎてやっと着いたが閉店していた。
同じビルのホテルのフロントに鍵を預けてホテルに向かう。

エルサレムでは 3 泊の予定、合計 660 ドル。

1 月 2 日（木）
ホテルから徒歩で旧市街に入る。ベテスダの池がある聖アンナ教会へ。
ベテスダの池は近年発掘されたらしい。大きくて深い貯水池である。聖書の記述どおりの構造である。

ベテスダの池

ドロローサの道を地図を頼りに歩く。

イエスが鞭打たれた場所の「鞭打ちの教会」

狭く石段のある道で両脇には土産物店がひしめいている。

クレネ人シモンに十字架を負わせたという場所は、上り坂になる手前だった。イエスが手をついた跡だという石が壁にあった。（右上）

ドロローサの最終地点はイエス様が十字架に架けられ、また葬られた場所に立つ聖墳墓教会。
この周辺は広く賑やかである。

（左）イエスの遺体に香油を塗った場所

ダビデの塔にある歴史博物館を見学。イスラエルの歴史が古代から近代まで紹介されている。

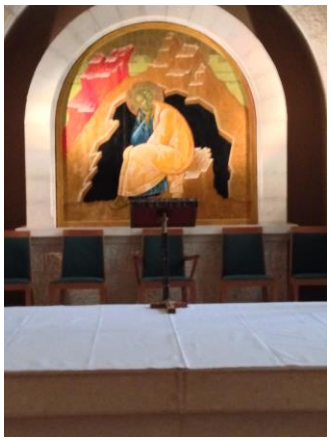
シオン門から出てマリヤ永眠教会へ。シオン門には中東戦争のときの銃弾の跡が残っている。

城壁の外の新市街に出ると、モダンな建物や、ストリートパフォーマンスなど、旧市街とはがらりと変わった風景になる。

途中で予定していなかったが、ダビデの墓を発見。ここでもユダヤ人が嘆きの壁のように体を揺らしながら祈っていた。
入口は男女別で、帽子を被らねばならない。
ここもユダヤ人にとって神聖な場所だった。ダビデがいかに尊敬されているか、改めて知る。

ダビデの墓

鶏鳴教会は、大祭司カヤパの家があったところ。
イエス様の裁判が夜行われ、ペテロがイエス様を知らないと否認したところ。
そのときに鶏が鳴いたことに由来する。
ペテロが否認、後悔、そして復活のイエスに会うという 3 枚の絵が飾られている。
地下には、イエス様の復活を宣べ伝えたペテロが投獄された牢がある。



ガリラヤ湖のペテロ召命教会と合わせて、イエス様とペテロの物語には感動を覚える。

イエスが盲人の目を開けたシロアムの池は、城外にある。ヒゼキヤ王が引いた水路の途中にあり、エルサレムの需要な水源であった。
もう薄暗くなっていて、地図を頼りに探したが非常にわかりにくい目立たないところにあった。
すでに閉められていたが、管理人らしき人が開けてくれたので水路まで降りた。
池といっても狭い水路みたいなものだった。奥の方で誰かが水浴びをしていたらしく管理人が怒鳴っていた。

ホテルに帰るため、通りがかったタクシーに乗った。ホテルに着いたときに妻がお金を渡した。すると後ろにバスが来て、運転手に早く降りろとせかされて後部座席にいた私たちは降りた。
そのあと助手席にいた息子は妻が渡したお金では足りないと言われ追加のお金を払った。降りた後妻が出した額を確認したところ騙されたことがわかった。変なところに止めて焦らせたのは作戦だったのだ。

1 月 3 日（金）
イエス様の墓を見るため、朝早く再び聖墳墓教会へ。

すでに大勢の人が詰めかけ、中に入るまでに長い行列。中は非常に狭く、入ると止まらずにすぐに出ろと言われた。
カトリックではここがイエスの墓だ言われているが、プロテスタントは明日行く予定の園の墓がイエスの墓だと考えている。

西の壁、いわゆる嘆きの壁に入るところにセキュリティチェックがあることに驚いた。
ここでも男性と女性の場所が分けられている。キッパ（小さな帽子）を被らねばならないが、入口で借りることができる。
体を揺らしながら熱心に祈っている姿には厳かなものを感じる。

神殿の丘に行こうと入口を探したが見つからず、聞くと日曜と月曜しか入れないとのこと。
残念だ。事前調査で抜けていた。

城壁の外に出て、ゲッセマネの園へ。（マタイ26章）
ここには樹齢数千年のオリーブの木がある。祈るイエス、逮捕されるイエスの姿をこのオリーブの木は見ていたのだろうか。

オリーブ山に徒歩で登る。急な坂で結構きつかった。
主の泣かれた教会は、エルサレムを見渡せるところにあり、
イエスが「ああエルサレム」と人々の不信仰を嘆かれた場所。
この教会は涙の形をしている。

頂上にある昇天教会は、復活後のイエスが天に昇られた場所とされている。

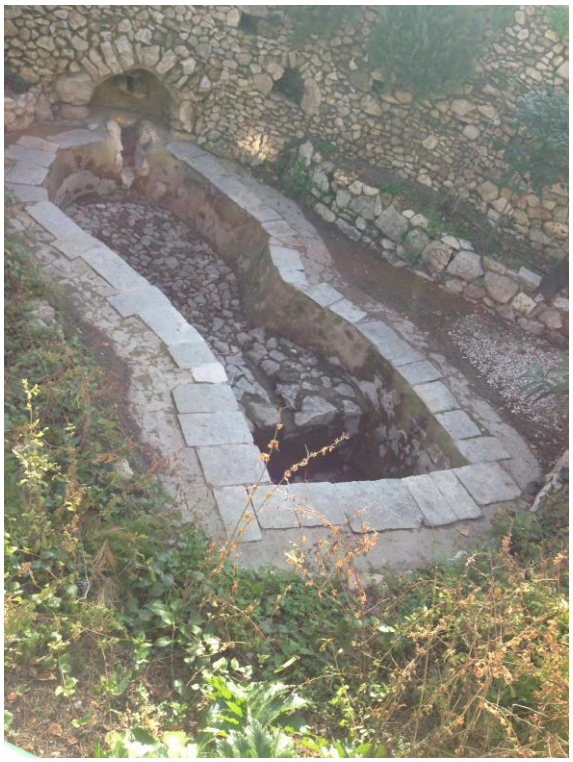
このあたりはスリが多いので気を付けるように係の人に言われた。

城壁内に戻り、フランシスコ会が毎週金曜日に行うドロローサの行進に参加。
ラテン語のような歌を歌いながら歩き、要所で司祭がお祈りをする。
自分たちで回ったときには気づかなかった場所もあった。
アラブ人らしい女性が文句を言うような声で割り込んできて、参加中の女性と口論していた。
邪魔だと言いたいのか、キリスト教が嫌いなのか。

金曜日なので神殿の丘で礼拝を終えて帰るイスラム教徒の群れでごったがえし、ドロローサの行進があり、夕暮れには安息日の礼拝に向かう正装したユダヤ教徒が続々と旧市街に入っていく。まさに3大宗教の聖地であることを実感した。

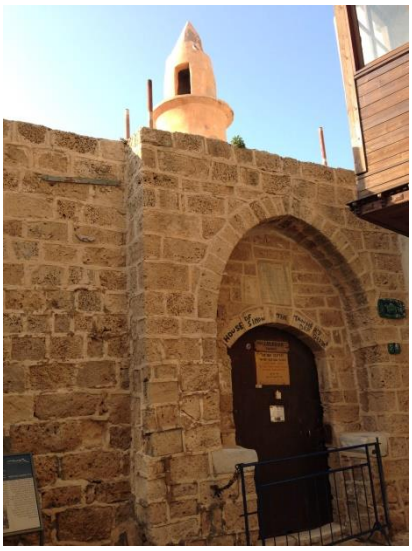
ホテルに帰るためにバス停で案内を見ていると、通りがかりの人が「今日は安息日だからバスは来ないよ」と教えてくれた。そうだ安息日には交通機関も止まることをすっかり忘れていた。しかたなく歩くことにした。

１月４日（土）
ゴルゴダ、園の墓へ。
カトリックはドロローサの終点である聖墳墓教会を十字架と墓の場所とするが、プロテスタントは城壁の外のこの場所と考える。
ここはイギリスが管理しているので、よく整備、清掃されており、土産物も良いものがそろっている。



ぶどうの絞り場（右）があることから裕福な人の庭園で、アリマタヤのヨセフのものと考えられている。

明日帰国のため、（安息日なので）、タクシーでテルアビブへ。
ホテルにチェックインした後、息子はレンタサイクルでサイクリングへ、私たちは歩いてヤッファへ。



ヤッファは（聖書ではヨッパ）はヨナが神の命令に逆らって船出したところであり、またペテロが異邦人伝道への目が開かれる体験をした「皮なめしのシモンの家」（左）に行った。そこは現在誰かの住居になっているが看板が立っていた。
すぐ裏がヨッパの港であり、今でも歴史ある港町なのだ。

そのあと、今回の旅では唯一近代的なショッピングモールで買い物をした。

１月５日（日）
ホテルからタクシーで駅まで行く。駅にも検問があり、驚く。
空港まで切符を買おうとすると、無料バスがあると教えられバスに乗る。
バスの一番後ろには銃を持った兵士がひとり座っている。
エルサレム市内でも銃を持って見回る兵士がいたが、これが現実なのだという思いがした。

空港のチェックは厳しく、何時間も聞かれたり荷物をすべて出されたり、と言う情報があったが、並んでいるときに簡単な質問があっただけだった。しかし私のバッグだけ X 線で引っかかり中を開けさせられたが、大量のコースターがあやしまれたらしく、これはあなたが買ったものか、という質問だけですぐ終わった。
イスタンブール経由で帰国の途につく。

聖書の中の世界でしかなかったイスラエルを実体験できたこの旅は実に有意義だった。
まだ行きたいところはたくさんあり、もう一度来たいという思いを胸に帰国。

この旅で知ったことは、本を読んだり調べたりすればわかることかもしれない。
しかし現地で感じたことは心に染み込んでくる気がする。ことばや写真では伝えきれない。